

## ◆プロローグ

「いらっしゃいませ」

思い切ってドアを開けると僕と同じくらいであろう歳の女性がいた。

緊張が少しだけ解けて、ほっと息を吐く。

「どうも」

「何かお探しですか？」

「いえ、そういうわけではなくて……その一……なんとなく」

「ふふ、そうなんですね。ここでお会いできたのもひとつのご縁でしょう。ゆっくりと見て行って下さいね」

この手の客には職業柄慣れているのだろうか。

彼女は僕の言葉に嫌な顔ひとつせず奥へと促すように滑らかに手を動かした。

その行動に導かれるままに、一歩、二歩と歩みを進める。

道路に面していた店構えはとてもシンプルなもので、扉も装飾のないまるでプレハブ小屋のドアのようだったが、中に入ってみるとその印象は一変した。

靴がふわりと沈みこむ分厚い絨毯はそこらで簡単に目にかかれるようなものではない。

ましてや僕のような一般市民がこうして上を歩くことはないような上質なものだった。

どこの国の地方のデザインなのだろうか。とても独特なそれは、どこかの名産品に違いない。観光ガイドブックで紹介されていそうな美しい代物だった。

この場所はよく通るが、この建物の一階部分はギャラリーとして使われることが多く、ひとつの催し物が終わればすぐ次のイベントが開催される。ひとつの企画が長きにわたって入っていることは少なく、普段は気にも留めなかった。

こうして足を踏み入れるのは勿論初めてだ。

どうしてだろう。今日に限って入ってみようと思ったのだ。

昨日の夜からこの街はとても賑やかだ。

年に一度の収穫祭。様々なイベントが街のあちこちで催されていた。

あまり興味がないと思っていたが、知らないうちにその喧騒や興奮に自分も少なからず影響されていたのかもしれない。

外に掲げられている「ギャラリー」という小さな案内から、絵の展示場かなにかだということはわかったが、もし安易に足を踏み入れたら無理矢理にでも買わされてしまうのではないかという不安を少し前の自分は微塵も抱いていなかった。

入らなければならない。  
そんな気さえしていた。

「……………」

無言のまま辺りを見回す。

この企画も長くここで開催され続けるとは思えないのだが、中はとても急にしつらえたような簡素なものではなく、長くそこに在ったような気さえしてくるほどに、豪華で重厚で空気も馴染んでいるように思えた。

天井には大きなシャンデリアがひとつ。

幾つも取りけられているひとつひとつの飾りが眩く輝いている。

プラスチック製ではなく、ガラスなのだろう。

だが燈された灯かりはさほど強くはなく、部屋の明るさは、壁に据え付けられた燭台を模した間接照明によって補われていた。

急にその場にいることが怖くなってきて振り返って女性に尋ねた。

「えっと……私はあまりこういうところに訪れたことがないので……」

「はい」

少し後ろに彼女は変わらぬ表情で立っていて、ほっと胸を撫で下ろす。

この不思議な空間自体が悪い夢のようで、彼女も霧のように消えてしまっているのではないかと一瞬妄想したからだ。

「何をどう見たらいいのか……」

「左様でございますか。では、説明致しますね。私たちは美術品、骨董品の展覧会と即売会を兼ねた移動式のギャラリーを営んでいます。ただ鑑賞して行くだけの方もいらっしゃいますし、購入するという明確な意思を持っていらっしゃる方も勿論」

「はあ」

「絵画の楽しみ方というのは人それぞれです。見て楽しむ方。多くの方がこれにあてはまるでしょう。自分が気になる点がひとつでもあればそれでよいのです。絵は視覚で楽しむことが第一ですから。他には…  
…そうですね、価値を重んじる方。そして込められた意味や解釈を重んじる方」

「価値を重んじる……は美術的価値、つまり作者のネームバリューとかそういうことでしょうか」

「その通りです」

「それでは、込められた意味や解釈……とは」

「絵には様々なジャンルが御座います。見たままを描いたものもあれば、見た目ではただの絵画でもそこに様々な意味が込められていることもあります。例えば、こちらに掛かっている絵」

女性は近くに掛けられていた一枚の絵画に手を翳す。

僕がその絵を捉えたのを確認すると、再び話を始めた。

「ある部屋で開かれている宴の絵画です。ぱっと見ただけでは多くの人が盃を酌み交わし、楽しく語っている……そんな場面に見えるかもしれません。しかし、それは知識を持つ者が見れば、そこに色々なメッセージを見出すことができるのです」

「へえ……」

「おもしろいでしょう？」

「え、ええ、まあ」

本人があまりにも楽しそうに話をするので否定するのも気が引けて曖昧に頷いてしまう。

彼女は満足そうに笑った。

「この見解は“図像学—イコノグラフィ”もしくは“図像解釈学—イコノロジー”と呼ばれて学問としても成立しているんですよ。主に宗教画の解釈に用いられることが多いですが」

「そ、うなんですネ……」

聴き慣れない単語が次々と出てきて軽いめまいを覚える。

「あ、申し訳御座いません」

困惑した表情が出てしまっていたのだろうか。

彼女はそう口にすると、姿勢を正した。

「あ、こちらこそ……すみません」

慌てて口元を引き締める。案内してくれていたのに気を遣わせてしまうなんて。

「いえ。でも……やはり絵は気軽に楽しむものであってほしいと私は思っています。このギャラリーをぐるっと見まわしてみて……そうですね……何か気になる美術品はありませんか？」

「気になる絵、ですか……」

「はい。絵画というものは、“気になる”というその些細な興味から始まったりするものですよ」

画廊に並べられているたくさんの美術品に視線を移していく。

風景画、肖像画、静物画、人物画、よくわからない抽象的な絵画——。

ジャンルを問わず、大きさも様々ある絵画が飾られている。

今まで絵を鑑賞するなんていう自分の中では高尚だとも思える行為をしてきたことがなかったから、ある程度の説明を受けてもやっぱり突然興味が湧いてくるといったこともなく、特にないと返事をしようとしたその時だった。

「……………」

画廊中央にある、さほど大きくない絵画。

それを見たとき、妙な胸騒ぎを感じた。

既視感？

教科書や本で見掛けたことがあるのだろうか？

いや、過去に見たことのある懐かしいものを再び記憶の淵から呼び起こしたという達成感にも似たあの感覚とは全く違う、じりじりと、まるで胃の裏側を炙られるような焦燥感。

こんな感覚は初めてだ。

自分でも気付かないうちにその絵画を指差していた。

「……あちら、でしょうか」

震える指の先を辿った刹那、彼女が大きく目を見開いたように見えた。

しかしすぐ元の表情に戻り、穏やかな笑みを浮かべる。

「まあ、お客様。お目が高いですね。実はこの絵、いわくつきなんですよ」

「いわく……？」

突然出た物騒な単語に、焦燥感が更に煽られる。

「ええ。描かれているのは黒衣を纏った女性。その女性に対して、白い装束を纏った者に続き、民衆が武器を持って立ち向かっていっています。奥に大きな満月と高い塔、辺りには蒼く深い闇が満ちています」

「はい」

「この絵は一見、黒い衣を纏った魔女のようなこの人物が、光を纏ったこの白装束の救世主と対峙している絵に見えます。そう、この辺り一帯に伝わる“ニウェウスの伝説”を絵にしたものです。聞いたことがありますね？」

「ああ、思い出しました。有名な昔話ですね」

この地域では有名な昔話……おとぎ話といってもいい。

絵本や紙芝居になって子どもたちに親しまれている物語だ。

自分も幼い頃に読んだことがあるような気がした。

光の救世主が闇の魔女を倒す……といったようないわば王道の勧善懲悪物語だ。

「ええ、そうです。しかしその昔話は捻じ曲げられた話だと、聞いたことはありませんか？」

「えっ……？」

あんなに多くの人々に親しまれている王道の物語が……？

「歴史とは勝者が紡ぐもの。改変された歴史の真実を伝える為に、とある画家が描き残したと伝えられています。そして彼はこの絵を描き終わったすぐ後に若くして死んでいるのです。その際に起こった争いによって死んだとも、自殺だったとも……いくつもの説が流れています」

「えっ……」

本当にいわくつきの絵のようだ。

絵画の呪い？

テーマ、モチーフの呪い？

それとも昔話に出てくる魔女の呪いかなにか……？

考えを巡らせていると彼女は説明を続けた。

「私はこう考えております。何者かによって殺されると知った彼は絵に、全ての真実を込めたのです。その画家は画像学を学ぶために海外留学の経験があったと言われていています。画像学の知識を駆使し、色、物の配置、描かれた要素、全てに彼の明確な意思と遺したかったものを表現しているのです。死ぬと悟った

上で、彼はこの絵を描いたのでしょう。これが先程お話ししました、画家がメッセージを込めた絵画です。

知識ある者が見れば真実が浮かび上がります」

一気にそう語ると彼女はふう、と軽く溜息を吐く。

頬が紅潮している。少し興奮している様子に見えた。

「じゃ、じゃあ、見た通りの絵ではないということですか？」

「私はそう考えております。描かれたオブジェクト全てがそう告げていますから」

「真実……ですか。でも、それが真実かどうかは誰にもわかりません。仰る“真実”こそ、捻じ曲げられた話かもしれませんよ。そう解釈されるようその画家はわざとそう描いた、とか……」

「そう思いますか？」

「あ、いや……そう、かもしれないなって……」

彼女の強い眼差しに委縮してしまう。自分は可能性を述べただけなのだ。

彼女は一度目を伏せる。それから睫毛を震わせ、眼を開くとその瞳には強い輝きだけではない、どこか切ないような色が帯びていた。

その表情に心臓を掴まれるような衝撃を受ける。

彼女がこんな表情をする理由を、彼女のそんな表情をさせてしまう理由を、きっと僕は知っている。

その考えを肯定するかのように、彼女は口を開いた。

「あなたは、それが真実だということを知っているはずです」

「……え？」